



1960～62年にかけて行われた山口県見島調査（萩博物館提供）

### 地域文化の振興と フィールドワーク

次に、宮本先生のフィールドワークについて、地域文化の振興という視点から振り返ってみたいと思います。

宮本先生のフィールドワークは、周知のとおり戦前の民俗探訪の旅に始まり、戦後は農業改善等の農村指導の旅、九学会連合等の学術調査への参加、また離島振興や山村振興に関する調査研究と、幅広い足跡を残されています。そして、それらのフィールドワークは単なる民俗調査にとどまらず、その成果を地域社会に還元し、これからの地域社会の在り方を提言することともに、地域振興のよりどころとなることを指向されたことが特徴です。

戦後の宮本先生は、篤志家がいなくなり地域社会の方向性を見失った戦後の日本、さらに高度経済成長に伴う地域社会の変容・解体現象がすすむ中を歩かれました。それは、自然環境・生活環境が激変し、人間が生きていく自信を失っていく中で、その再生を絶えず考えつつけるという課題を背負われてのフィールドワークであった、と言えないでしょうか。そして、地域社会の伝統的文化をいかに将来に継承してい

くかに関心を持たれ、地場産業の振興、伝統的文化を生かした町づくり、地域社会の活性化に多大な影響をあたえつづけられたと言えるかと思えます。

地域振興の実践活動については、宮本先生は昭和二八年に離島振興協議会をつくられ、また翌一九九年には林業金融調査会を結成され、離島問題や山村問題に本格的な取り組みをなされています。そして、数々の離島や山村を歩かれ、日本の片隅に置かれた地域の人々に愛情を注がれ、地方の置かれていた現況を打破したい、との思いを強く持たれています。そこには、地方と中央の格差がひらいていく高度経済成長期という時代背景があったことも忘れてはならない点だと思われま

す。(つづく)

注

- 1 宮本常一『民具学の提唱』未来社 一九七九年、七二頁
- 2 前掲八五、八六頁
- 3 前掲八七頁
- 4 前掲八七頁
- 5 前掲八七、八八頁
- 6 前掲八九頁
- 7 前掲九六、一〇四頁
- 8 前掲一〇五頁

この文章は第二十四回日本民具学会大会（一九九九年一月一日・成城大学）で行われた報告を掲載した『民具研究』第二二二号（日本民具学会、二〇〇〇年八月）より許可を得て転載しました。続きは次号に掲載します。

### 編集後記

宮本常一記念事業策定審議会と旧東和町が編集発行してまいりました「郷土」も、平成三年の創刊以来、十四年が経過し、十三号を数えるにいたりしました。今号からは昨年五月にオープンした周防大島文化交流センターが発行いたします。

センターのオープン以来、全国から数多くの方が来館されています。当センターに寄せる皆さんの思いもさまざまで、職員一同教えられることの多い毎日です。

来年度（平成十七年度）はオープン二年目を迎え、さらに充実した活動を進めていきたいと考えています。今後ともご支援のほど、よろしく願っています。

## 周防大島 文化交流センター オープンから 十ヶ月！

平成十六年五月十八日、周防大島出身の民俗学者・宮本常一（一九〇七～八一年）の関連資料展示室と体験学習室（図書室）を兼ね備えた「周防大島文化交流センター」が東和地区平野にオープンしました。

以来、およそ十ヶ月が経過し、島内外から、宮本常一や周防大島の歴史・文化に関心のある皆さんが多く足を運んで下さっています。また、真宮島、下田八幡宮、久賀地区などを舞台に、郷土を学ぶ体験学習を実施し、多くの方が参加されました。次年度はさらに活発な活動をおこなってゆく予定です。

今後、地域の皆さんが郷土を知る場として、文化交流の拠点として、引き続き当センターを活用していただきたいと思っています。

【開館時間】午前九時半～午後六時（展示室の入場は午後五時半まで）。

【休館日】水曜日（祝日の場合は翌日）と年末年始

【展示室の観覧料】一般三〇〇円（高校生以上）、大島郡内の小中学生は無料。

【問合せ】周防大島文化交流センター

0820(78)2514

<http://www.towatown.jp/koryu-center/koryu.html>

# 郷土のますますの発展を皆で心がけましょう！

周防大島文化交流センター名譽館長

米安辰

「郷土」の創刊号は、平成三年三月二〇日に発行されていますから、今年で早や十四年になります。私はこの創刊号に、宮本常一記念事業策定審議会専門部会長として寄稿の依頼があり、「郷土のことは郷土で」という題名で書かせていただいたことを、懐かしく思い出しく、月日の経つのは早いものと思いますが、その通りだとつくづく思いました。宮本先生が亡くなられたのが昭和五六年一月三〇日ですから、十四年前といつことになります。「歲月人を待たず」といふ言葉がありますが、まさにそのとおりです。

平成十六年五月十八日にオープンした周防大島文化交流センターは、同十月一日に大島郡の四町が合併して周防大島町となり、周防大島町の文化交流センターとなりました。

## 館内のご案内

- 1、体験学習室  
体験学習室（図書室）  
研修室
- 2、展示室（宮本常一関連資料他）  
フロア展示（周防大島東部の生産用具）  
壁面展示（宮本常一の目）  
回廊展示（写真でつづる宮本常一／宮本常一の仲間たち）  
木組み展示（長州大工の技）  
書籍収蔵庫  
資料閲覧室  
宮本常一撮影写真閲覧コーナー
- 3、その他  
周防大島の貴重な植物の展示  
体験学習農園



平成16年8月6日、高校総体視察のおり当センターを訪れた高円宮妃殿下（右）



平成16年7月10日、トウモロコシの収穫



平成16年6月19日、サツマイモ苗の植付け

かにしなければ本当の研究にはならないと主張する」と記されています。その基本的な考え方がフィールドワークで展開されたのが、昭和四〇年代に入ってからではないかと思われまます。宮本先生の昭和四〇年代最初の民具調査は、広島県油木豊松地区のダム建設に伴う民俗調査の一環として行なわれています。その調査の様子は、「各地区の生産生活の聞き取りをすると共に民具の写真などをとった。」（中略）調査といえるようなものではなかった。（中略）とにかくそれらの民具は集めて保存する必要のあることを（中略）力説し、たと記されています。

また、昭和四一、四二年の民具調査では一戸の所有民具の悉皆調査の重要性を説かれています。昭和四一年の椋梨ダム水没地の調査においては、「共通する民具を持ちつつ、その所有量に差のあることも検討しなければならぬ」ということを強く感じた」と述べられています。

翌四二年の広島県八千代町土器の水没地区の調査では、八戸ほどの家の所有民具をできるだけ数多く丹念に見て、それを一つずつ写真にとり、計測し、また聞き取りを行ない、六〇〇点ほどの民具をしらべられています。この

時、「はじめて民具について調査らしい調査をした」と回想されています。その時の調査の様子については、「調査にあたっては家のまわり、縁の下、土間におかれたもの、納屋にあるものなど一つ一つを丹念に見てゆき、それをゴミを雑巾でぬぐい、時には水洗いし、家の前などで撮影し、寸法をはかり、名前を聞き、製作地、製作者、購入地、購入時期、価格、使用法などを聞いてゆく。」（中略）これを朝、日の出た頃から、夕方日の入るまで続けるのである。民具を調べていると、その家がどういう家であったかが実によくわかるだけでなく、一戸一戸の生活のたて方がみな違っていたことがわかる。（中略）村の生活や構成、他地域との交流の実態をつかむには家々の所有民具を見なければならぬことを痛感したのである。」と述べられています。なお、この時の調査体験をもとに、宮本先生は民具の定義について書かれています。

そして、民具調査に対する視野の開けた時期は、昭和四三、四四年であると同想されています。武蔵野美術大学生活文化研究会のメンバーを率いて、昭和四三年に東京都青梅市の民具調査を行ない、翌四四年には青梅市の民俗

緊急調査にあたられています。この時は、各集落で一戸から二戸の家をえらび、その家の所有する民具をできるだけわしくしらべて記録する方法を取られています。そして次のように述べられています。「民具の調査については私自身の視野のひろげて来たのはこの時期であったが、同時に民具の調査事業の容易でないこともよくわかって来た。（中略）分類も従来のままではいかどつかというところなどが問題になって来る。／＼ということでは、民具とは何ぞやということがたえず問題になって来るからである。つまり民具は手足の延長である、といふことである。（中略）民具を見ることは生活を見ることであつた。」と記されています。

民具の調査方法論や、民具調査と地域社会との関わりについては、『民具学の提唱』に次のようにまとめられています。「とにかく一戸一戸の民具を丹念に見ていくことから民具調査ははじめるべきものであることを提唱したい。（中略）次に一戸一戸のこまかな調査のほか、一地域に残存する技術や民具をくわしく見ていく必要がある。（中略）さらにそのついでに、一つ一つの地域に長い時間をかけて調

査をすすめるなければならない。（中略）本場の調査ならば何回もおなじ地に出かけていってこまかに見、また聞き、時には体験することが大切であると思う。（中略）そして単に調査をするだけではなく調査を機会に密接な人間関係の生れて来るのがぞましいのである。」「ここでは、調査の手法とともに、調査を機会に地域の人々と密接な人間関係を持つことの大切さが主張されています。

さらに、「物をして語らしめる」とこの重要性について、次のように述べられています。「正しいイメージの描ける民俗誌を書くためには、その地域の全体像をまずつかんでいなければならぬと思つ、と同時に聞きたいことを聞いて来ただけの項目主義的な調査でも十分ではなく、相手をして語らしめ、物をして語らしめることが重要である。以上は、いずれもフィールドワークにおける宮本先生の基本的な姿勢であり、これらはいずれも先生が我々に身をもって教えようとした基本的な事柄である、と私自身受け止めています。

ここで、宮本先生に連れていかけていただいたフィールドワークで学んだことをお話しします。学生時代に最初に同

# フィールドワークにおける今日的課題①

愛知淑徳大学 教授 谷 沢 明

## はじめに

最初に、宮本常一先生との出会いについてお話しします。学生時代、旧街道を歩いたり、古い町並みを訪ねることが好きで、よくフィールドワークに出かけました。最初に先生にお目にかかる機会に恵まれたのは、大学三年のとき（昭和四六年）、府中市にあるお宅をお訪ねしたときです。高校時代に使った三省堂の国語の教科書に『忘れられた日本人』の一部が載っており、お名前だけは存しておりました。

その晩、感動的なお話の数々を、夜のふけるのを忘れてお聞きしたことを、今でも鮮やかに覚えています。それまで、村や町を歩いてきた中で、漠然と八ダで感じていたことが、ひとつの方向性をもって導かれる思いがしました。

そのことが「縁で、宮本先生のお勤めする武蔵野美術大学で、講義を聴か

せていただくことになりました。ただし、授業料は払っていません。当時はのんびりした時代で、おもしろそうな講義があると、それを伝え聞いた他大学の学生が教室に入入りするということもけっこうあって、それが黙認されていたところがありました。宮本先生の教室にも、実際、何人かそのような学生が来ておりました。

また、講義だけではものたりず、先生が主催する「生活文化研究会」にも加えていただくことになりました。この研究会は、なかなか楽しい会で、学生のみならず卒業生も参加しており、それぞれがテーマを持ってフィールドワークを行ない、そこで発見したり学んだことを報告しあい、先生がコメントするというやり方で進められていました。週一回開かれる会が終わるのは、たいてい夜の八時を過ぎており、玉川上水の雑木林の小道を先生を囲みながら駅に向かったものでした。

宮本先生は、また、「自身が行なう

調査研究に、よく我々学生を連れて行ってくださいました。私は、瀬戸内海や中国山地などにご一緒させていただき、調査地での人々への接し方、調査の姿勢を身をもって教えられました。その基本的な調査態度を学生時代に学ばせていただいたことは、今思えば、得がたい経験であったと受け止めています。

一〇代後半から二〇代にかけて、すばらしい師、そしてともに歩く仲間に恵まれたことを、大変嬉しく思っています。また、この時期に学んだことは、人生の方向を定めるとともに、生き方の基礎を形づくる上で、大きな力となった、と思っています。学生時代に行なったフィールドワークの魅力にとりつかれ、卒業後も引き続き、宮本先生の研究所で勉強させていただくことになりました。そして、先生から教えられたことを教室という場で学生たちに伝えていくことを仕事として今日に至っています。

## 民具を対象としたフィールドワーク

次に本題に入ります。レジュメに従って「フィールドワークにおける今日的課題」というテーマで報告をさせていただきます。

宮本常一先生が民具を対象としたフィールドワークを本格的に開始されたのは、昭和四〇年代初頭のことです。その契機となったのはダム水没地域の民具調査であり、高度経済成長に伴う山村・農村の社会変容を背景としていた時代にあたります。一方、武蔵野美術大学に着任され、学生たちと結成した生活文化研究会を率いて二戸一戸の精密な民具調査を行ない、さらに一地域に残存する民具や技術をみていくことにより、地域社会の生活文化を民具を通じて語りしめることの意義を提唱されています。

しかし、民具調査の基本的考え方はすでに戦前に見られます。『民具学の提唱』によりますと、昭和一六年頃、民具は形態や製作法や民具にともなう伝承をしらべるだけでは意味がない。一戸ごとの民具の保有量、使用法、消費率、改良などを含めて、生活の中にとどのように位置づけられているかを明ら

## これまで実施した体験学習

- 平成十六年
- 六月十九日 サツマイモ・大豆の植付け(センター)
  - 七月一〇日 トウモロコシの収穫・調理 寒天づくり ソバの種蒔き(センター)
  - 七月三〇日 早川康博先生 海的环境調査(真宮島、センター)
  - 十月十六日 サツマイモの収穫・調理(センター)
  - 十一月二七日 南敦先生 宮の森を歩く(下田八幡宮、センター)
- 平成十七年
- 一月二九日 印南敏秀先生 久賀の石積み棚田を歩く(久賀)

## 情報 古写真・パソコンを使った学習

### その他の主な実施事項

- 1、インターネットでは三年前から宮本常一の写真を約一万四、〇〇〇枚公開してきたが、ほぼ全ての八万九、七〇三枚を館内パソコンで閲覧できるようにした。(七月二六日)
- 2、高田宮妃殿下お成り。(八月六日)
- 3、広島大学学生がボランティアで蔵書整理。(九月一月)
- 4、府中市郷土の森博物館の学芸員が調査のため来館。(十月、十一月)
- 5、東和ボランティア・ガイドの会の研修受入れ。(十一月十七日)
- 6、新潟県中越地震災害被災者支援チャリティイベント 上映会への協力。(十二月十三日)
- 7、「宮本常一著作集ガイド本執筆者公募 生誕一〇〇年記念刊行へ。締切、平成十七年六月二〇日。

## 今後考えられる体験学習

- 自然
- 自然観察 地形模型の制作 シーボルト関連植物についての学習
  - 農業
    - 野菜栽培 花卉栽培 蜜柑などの果樹栽培 稲作 サツマイモ栽培
    - 漁業
      - 磯漁 釣漁 網漁
      - 島の暮らし
    - 郷土料理・特産品づくり 藁細工 紡織体験
    - 竹炭焼 民俗学 石風呂の入浴体験

以上、これまでのことを振り返ってみますと、平成三年から平成十七年まで十四年も経過し、年齢も八〇歳を過ぎ、切りの良いところで、若い方にバトンタッチしたいと思っています。

長い間、関係者の皆様のご協力、ありがとうございました。周防大島町と皆様の今後のますますの発展を祈念し、お礼の言葉とします。



平成16年11月27日、宮の森を歩く



平成17年1月29日、久賀の石積み棚田を歩く

# 宮本常一先生の足跡をたずねて

## 佐渡ヶ島に渡る

宮本常一先生の本を読む会 会長 高田 壽太郎

平成十三年九月、「宮本常一先生の本を読む会」を立ち上げ仲間と隔月毎に開く読書会は、生前の先生の功績を知るだけでなく、先生を敬い親しみを待つ仲間との人間関係を深めていく場となっております。

「読む会」を続けていく中で、全国各地に偉大な功績を残されている先生の足跡をたずねてみようかと企画し、最初は一昨年六月対馬を訪れました。

昨年は先生が三〇回以上も訪ねられたと言われている佐渡へ出かけました。とは言え最初は佐渡への予備知識はなく不安を感じましたが、事前に宮本先生の奥様（アサ子さん）に佐渡の知人を紹介していただいたり、佐渡にお詳しい真島俊一先生（TEM研究所）や佐田尾信作記者（中国新聞社）から、多くのアドバイスや助言を受け行程を決定しました。紹介された宿根木の称光寺の林道夫住職を訪ねて行くことに

して昨年（平成十六年）五月二五日佐渡への旅に出発しました。林道夫さんとは初めての出会いでしたが本当に気さくな方で、いろいろと話し合いながら「宮本先生ゆかりの地」を案内していただきました。

### 柿団地

宮本先生のアドバイスを受けて、品種改良が繰り返されて、今では佐渡特産の「おけさ柿」となっている柿畑を案内して頂きました。広々とした畑に整然と多くの柿の木が植えられ、柿の団地が出来ていました。形の整った木々、管理の行き届いた畑などを見学し感動させられました。季節柄果実はつけていませんでしたが、耕作者の青木さんから柿づくりの苦労を聞かせていただきました。剪定、数回の消毒



交流会での楽しいひとコマ

摘果など一年間ほとんど休む暇もない労働の連続とか、大島のミカンづくりと重ね合わせて聞き入りました。これからは高齢化による作業の継続の難しさ、後継者問題などの課題が多いとの話でした。

### 民宿と交流会

小木町では全員でタライ舟を楽しみ、温泉に入浴後に林さんのお手配で民宿、琴浦ダイビングセンター（女性）と宿根木アトリエハウス（男性）に分宿して休みました。特に男性の宿泊し

学し両津の宿に入りました。

### 佐渡能楽の里 北方文化博物館

旅の最終日は、まず、貴重な鳥・トキをトキの森公園で間近に観察しました。次いで佐渡の伝統的な芸能である能楽を佐渡能楽の里で観賞、能舞台に展開される人形の動きに釘付けになりました。新潟市に戻り宮本先生の助言で保存されている北方文化博物館を訪ねました。大きな構えの古い民家です

### 二泊三日の旅を通して

たが、内部の民具などを通して、昔の豪農の生活を偲びました。新潟ふるさと村で夕食を済ませ、空路帰途に就きました。

充実した行程を立てるまで、多くの皆さんから助言を受け、事前に勉強したので研修の成果が上がったと思います。

佐渡では、称光寺の林道夫さんをはじめ宮本先生と関わりを持たれていた多くの方達と交流を持つことが出来、大変お世話になりました。これを機会に今後も更にこの輪を広め、深めていきたいと思えました。佐渡の皆さんの文化・芸能に対する熱い思いと、それを継承していくこととする前向きな姿に学ぶべきものが沢山ありました。

「宮本常一先生の本を読む会」  
お問い合わせ先

0820(78)0358  
高田 壽太郎（長崎）



廃校になった小学校の校舎を利用した佐渡国小木民俗博物館

近くにある和船の里で、威容を誇る千石船「白山丸」を見学、当時の面影を想像しました。この船は年に一度屋外に特別展示されると聞きました。そして、珍しい建物や古い建物の並ぶ宿根木の町並みを散策し、林道夫住職の称光寺で宮本先生が昼夜を問わず執筆された本堂隣の部屋も見せていただきました。

### 鼓童村

その後、岩屋山窟堂を見学して鼓童

村を訪ねました。代表の大井良明さんから施設内を案内して頂き、大小様々な太鼓のある巨大な道場も見せていただきました。全国各地から集まった若者達が佐渡の芸能を継承し、太鼓の持つ魅力を広めていく姿に深い感銘を受けました。また、宮本先生直筆の鼓童に対する熱い思いの手紙が額に入れられ、部屋に飾ってありました。

### 相川郷土博物館

昼食は出発前に真島先生から紹介されていた小木町の「生そば七右衛門」という店の佐渡自慢の生そばとそば茶に殆どの人が何杯もお替りをしました。次に相川にある佐渡奉行所を見学し、相川郷土博物館を訪ねました。ここにも宮本先生の指導によって収集された多くの民具があり、館長の佐藤利夫さんからいろいろと説明していただきました。すぐ近くに「裂き織」という織物をしている相川技能伝承展示館があり、織物をしているところや素晴らしい作品を見学しました。ここで一日間お世話をいただいた林道夫さんと再会を約束してお別れしました。その後、ゴールデン佐渡（相川金山）を見



相川郷土博物館で佐藤利夫さんの説明を聞く